

第3節 我が国における野外活動中の事故について

1. 野外活動中の事故の実態

野外活動は、現代社会における様々な変革を背景に、ますますその必要性が唱えられるようになった。これらの野外活動は、常に千変万化する自然環境をその実践の場とすることから、それら自然条件に対処するための多様な知識と行動能力が求められ、このことが領域としての専門性を強く特徴付けている。そして野外活動の有するこれらの特性が、最近では幅広い人間形成に資するための効果的手段としても認識されるようになった。

一方、これらの野外活動の特性は、天候の急変や環境の変化等、自然条件や行動の形態の上において多くの不確定要素を含んでいると共に、それらの活動は、各種の器材・用具に依存して行われていることが多く、これらの器材や用具の不備・不適切による事故も発生しやすいことから、常に事故発生の潜在的危険性を数多く内在しているものと言うことができる。

近年、野外活動の普及と興隆に伴って、海や山における一般愛好者による事故の発生が数多く報道されるようになり、特に目立つようになってきた。そしてこれらの事故例が、野外活動に対する関心を高め活動の成果に対する認識を持ちながらも、多くの教育現場や指導場面においてその実践を困難なものとし、活発な活動や一層の普及を阻害している主要な原因の一つともなっている。

これらの野外活動における事故は、以前よりその活動の実践と共に常に存在していた。しかし以前に比べて最近の事故は、普及に伴う現象としての単なる発生数の増加とともに、その内容においてもかなりの変化を呈している。一例として、平成元年10月の立山における高齢者集団遭難事故や、平成2年4月の九十九里海岸におけるプレジャーボート転覆事故などは、事故の形態や内容において、以前には例のないものであった。

近年では、急激に変化する社会に対応するための国家的施策として、文部省における自然教室推進事業や自然生活チャレンジ推進事業、また国土庁をはじめとした関連6省庁による総合保養地域整備法（リゾート法）、運輸省によるマリン'99計画をはじめとする各種ウオーター・フロント構想等の影響を受け、多くの関連機関や組織が、さらに積極的な野外活動の展開を促進するようになってきた。また活動内容においても、冒険的志向を強く持つようになってきている。これらの傾向は、野外活動の安全な展開について一層の注意を喚起する必要性を示すものである。

ここでは、平成5年（1993）の1年間に、新聞各紙において記事として報道された野外活動関連の事故を整理し、その実態と傾向について把握しようとするものである。

事例の収集には「月刊切り抜き体育・スポーツ」(IOM)を利用し、その掲載記事の中から活動別に整理して概要をまとめた。なお記事の整理については、整理番号、「記事タイトル」、(場所;掲載紙日付.新聞名)、記事内容、の形式でまとめた。

1) キャンプ中の事故

①「テント内で男性死亡」 (兵庫;93.5.3.神戸)

神戸市灘区の山中のテント内で男性二人が死んでいるのをパトロール中の警察官が見付けた。調べでは、密室状態のテント内でガスを使ったため、一酸化炭素中毒になったらしい。

②「キャンプの男性水死、度胸試しで海に飛び込む」

(沖縄;93.6.15.沖縄タイムス)

東村高枝の海岸でキャンプに来ていた男性二人が溺れた。一人は救助されたが、もう一人は間もなく死亡した。調べによると現場近くのキャンプ場で午前4時頃まで酒を飲んでいて、同6時半頃度胸試しをしようと、二人で近くの岩場から海に飛び込んだという。

③「酒沢のテント内炊飯中ボンベ飛ぶ」 (長野;93.8.16.信濃毎日)

北アルプス酒沢のテント場で大阪の大学生がテント内で炊飯中、おもしろとして鍋のふたにのせていたガスボンベが突然飛び上がり顔に当たった。病院に運ばれたが右眼球破裂の大怪我を負った。調べによるとガスボンベは空だったが加熱されて中の空気が膨張し、ロケットのように飛び上がったらしい。

④「転落の学生を救おうと水死」 (神奈川;93.8.27.朝日)

神奈川県藤野町のキャンプ場で、台風で増水した川に大学生二人が落ち、救助しようとした近くの自営業の男性が水死した。

⑤「キャンプ場、婚約の二人中毒死」 (長野;93.8.30.読売)

長野県川上村のキャンプ場で東京の会社員とその婚約者が死体で発見された。二人は、テント内で使用していたガス式のランタンの不完全燃焼により一酸化炭素中毒死したらしい。

2) 山岳事故(滑落・転落)

①「大山で遭難パーティー・4人救出1人不明」 (鳥取;93.2.3.日本経済)

鳥取県の大山に登山をしたまま消息を絶っていた広島山の会のパーティー5人のうち4人は、捜索隊により無事発見され下山した。しかし、男性1名は尾根から滑落して行方不明になっている。後日、行方不明になっていた男性は、滑落地点から自力で下山し、滑落事故に遭ってから約72時間ぶりに保護された。右手に凍傷、顔にかすり傷を負っており、からだのあちこちに痛みを訴えた。

②「八ヶ岳で男性が滑落死」 (長野;93.2.14.毎日)

長野県八ヶ岳の赤岳山頂西側の稜線から南西の谷に約 300 m 下った地点で、愛知県の男性が滑落して死亡しているのを救助隊が見付けた。

③「大学生 1 人遺体で収容」 (長野; 93. 3. 4. 朝日)

北アルプス・白馬岳で遭難した京都の大学山岳部員 2 人は、救助され大町市内の病院に運ばれた。また滑落して行方不明だった 1 人は遺体で発見された。

④「救助の 1 人が転落死」 (長野; 93. 3. 18. 朝日)

南アルプス・小赤石岳で東京の大学山岳会のパーティーのうち、1 人が約 300 m 滑落し、左足を骨折した。また救助に向かった 1 人が転落して死亡した。

⑤「山岳ガイド女性、中アで滑落死亡」 (長野; 93. 3. 29. 信濃毎日)

中央アルプスの宝剣岳と天狗岩の中間付近で東京の山岳ガイドの女性が滑落、捜索した結果約 800 m 下の沢で遺体で発見された。当日一帯は濃霧で見通しが悪く、小さな雪崩も発生している。尚、女性は山岳ガイドとして登山経験は豊富だったという。遺体は、民間ヘリによって収容された。駒ヶ根署によると死因は頸椎骨折と脳挫傷で即死状態だった。

⑥「吹雪の北ア 1 人死亡 2 人怪我」 (長野; 93. 5. 3. 信濃毎日)

2 日北アルプスでは吹雪にみまわれ、遭難が相次いだ。槍ヶ岳では福岡県の女性が滑落、全身打撲し両膝も骨折して山小屋に収容されたが死亡した。また、槍沢では神奈川県男性が、表層雪崩に足を取られアイゼンをひっかけ転倒、左足首の怪我。大天井岳では、神奈川県社員が鎖から手を滑らせて 5 m 滑落し、右太ももを切る怪我をした。

⑦「不明の男性遺体で発見」 (長野; 93. 5. 4. 毎日)

中央アルプス・宝剣岳で不明になっていた京都の男性は、滑落地点から約 700 m 下の谷で発見された。頭を打って即死だった。

⑧「宝塚の社員滑落し死亡」 (新潟; 93. 5. 5. 神戸)

新潟県八海山で登山者が 1 人滑落した。県警で捜索し、間もなく収容したが脳挫傷のため死亡が確認された。

⑨「不明の社員遺体で発見」 (北海道; 93. 5. 8. 北海道)

日高山系で消息を絶っていた札幌の社員の遺体が、雪崩跡の雪の中で体半分が埋まっている状態で発見された。遺体には骨折の跡があり、尾根から滑落した可能性も調べている。

⑩「東大 OB 転落死」 (福島; 93. 5. 24. 毎日)

福島県檜枝岐の山中で男性が道に迷って転落した。男性は深さ約 20 m の溜れた滝壺の底で死体で発見された。

⑪「芦別岳山頂で急死」 (北海道; 93. 6. 21. 北海道)

富良野の芦別岳山頂付近で登山者が死亡、一緒に上っていた 1 人が下山途中に滑落して骨折した。

- ⑫「北アで滑落死収容の仲間重体」 (長野; 93. 7. 25. 信濃毎日)
北アルプス奥穂高岳付近の雪渓で岡谷市の社員が足を滑らせて50m 滑落し、岩と雪渓の間に挟まれた。救助隊員が出動したが死亡していた。その頃遺体の収容作業をしていた男性の同僚が直径約 30 cmの落石を後頭部に受け、意識不明の重体となった。
- ⑬「男性下山中に遭難死」 (富山; 93. 7. 31. 毎日)
富山県の北アルプスで金沢市の男性が死んでいるのを、県警山岳部隊が見付けた。男性は妻と入山したが、遅くなったため登頂を諦め下山する途中転落し、心不全をおこしたらしい。
- ⑭「北穂高岳で遺体発見」 (長野; 93. 8. 4. 信濃毎日)
北アルプスの北穂高岳の大キレットで長野県側に転落、行方の分からなくなっていた大阪の社員を捜索していた捜索隊は、転落地点から 300 m下で遺体を発見した。
- ⑮「遭難の2 遺体発見」 (長野; 93. 8. 12. 神戸)
中央アルプス池山尾根で下山中に転落、死亡した大阪の男性と捜査に入っていた民間救助隊長の2 遺体を発見した。調べでは、尾根北側 200 m下った地点で頭を強く打って死んでいた。
- ⑯「登山中の社員崖から転落死」 (大分; 93. 8. 16. 熊本日日)
大分県の傾山で登山にきていた同県の男性と一緒に上っていた仲間が崖から転落したと三重署に届け出た。捜索したところ登山口から2~3 km入った崖の下20~30 mで男性の遺体を発見した。
- ⑰「富士登山2 人死ぬ寒さで31 才、滑落で71 才」 (山梨・静岡; 93. 8. 20. 読売)
富士山頂近くの登山道で男性が倒れているのを登山客が発見、病院に運ばれたが心不全で死亡した。当時は風雨が強く気温が低かったが雨具を付けておらず、寒さで倒れたと見られている。また、同日早朝登山をしていた男性が足を滑らせ転落、頭を強く打って死亡した。
- ⑱「大学生が滑落死」 (長野; 93. 8. 28. 信濃毎日)
北アルプス後立山連峰の大黒山で東京の学生1 名が岩場で足を滑らせ、長野県側に約 140 m滑落した。唐沢岳山頂山荘から救助に向かったが死亡していた。
- ⑲「前穂高岳で滑落、埼玉の男性死亡」 (長野; 93. 9. 20. 信濃毎日)
北アルプス前穂高岳で埼玉の男性が足を滑らせ約 200 m滑落し、頭等を強く打って死亡した。
- ⑳「不明の登山者は転落死」 (新潟; 93. 9. 26. 新潟日報)
福島県境の山に登ったまま行方不明になっていた新潟県の男性は、山頂から約 500 m下の沢の滝壺で死亡しているのが発見された。調べによると、男性は

1人で登山にでかけて道に迷い、誤って沢に転落、頭や首などの骨を折って死亡したらしい。

⑳「遊歩道に女性転落1人死亡、1人不明」 (富山；93.9.30.日本経済)

富山県の北アルプス黒部溪谷の樺平遊歩道で、観光にきていた女性が約150m下の遊歩道に転落、くびの骨を折り死亡した。また一緒にきていた姉も最終電車に乗車しておらず、遭難したものと見て搜索している。

3) 山岳事故 (行方不明・その他)

①「八ヶ岳連峰で遭難大学生1人死亡」 (長野；93.2.26.朝日)

八ヶ岳連峰・赤岳山頂から200m下方で、東京の大学山岳部員が遺体で見付かった。また同部員1名も救助され病院に収容された。

②「但馬・妙見で遭難死」 (兵庫；93.3.15.神戸)

兵庫県城崎市の金山峠付近の林道脇で男性がテントに入ったまま死亡しているのが発見された。現在身元確認を急いでいるが、現場は標高1000m以上の山中で約1.5mの積雪があった。

③「不明の男性の遺体を発見」 (長野；93.5.2.日本経済)

北アルプスの潤沢岳で男性の遺体が見付かった。豊科署の調べで、昨年暮れから行方不明になっていた東京の会社員と分かった。男性は12月30日から1人で入山したが、予定日を過ぎても戻らないため、家族から搜索願いが出されていた。

④「北穂の遺体は教諭」 (岐阜；93.5.5.毎日)

北アルプス北穂高岳で遺体で見付かった男性は、東京の小学校の教諭と分かった。登山届けは出していなかったらしい。

⑤「大分・祖母山不明から2日姉弟を無事保護」 (大分；93.5.6.毎日)

祖母山で2日から行方不明になっていた姉弟が発見、無事保護された。2人とも大きな怪我はなく、比較的元気だった。しかし軽い脱水症状をおこしているため、県内の病院に入院した。

⑥「山頂付近、遺体で発見」 (福島・山形；93.5.8.河北新報)

飯豊連峰で行方不明になっていた東京の会社員が、天狗山山頂から約200m下付近で遺体で発見された。男性は7・8年の山経験があり、テントも食料も持っていた。

⑦「山中で心臓発作」 (山梨；93.5.17.朝日)

北都留郡の権現山の山頂付近で東京の男性が心臓発作のため歩けなくなった。男性は病院に運ばれたが死亡した。

⑧「修行入山？12人遭難1人死亡6人救助5人は下山」

(鹿児島；93.6.21.京都)

鹿児島県屋久島の宮之浦岳に日帰りの予定で登山した山岳宗教のパーティーのうち7名が下山せず捜索を始めたが、6名は救助されたが、女性1名は寒さと疲労のため死亡した。鹿児島県气象台によると当日は、大雨洪水警報が出ており、雷雨が断続的に降っていた。

⑨「無意根登山の札幌の教員死亡」 (北海道; 93. 6. 29. 北海道)

札幌市の無意根山に上ったまま戻らない男性を捜索したところ、登山口から4kmのところまで川に半分からだを沈めているところを発見したが、低温による心臓停止で約10時間後に死亡した。

⑩「北アの山小屋に男性の腐乱死体」 (富山; 93. 7. 12. 京都)

富山県の北アルプス黒部奥山にある山小屋で、小屋開けにきた従業員が寝袋に入ったままの男性の遺体を発見した。遺体は腐乱状態で横たわっていた。

⑪「奥穂高で不明の男性遺体で発見」 (長野; 93. 7. 31. 信濃毎日)

北アルプスの奥穂高岳で行方不明になっていた男性が南稜末端付近の林の中で発見されたが、既に死亡していた。頭には傷があった。

⑫「富士登山の2人死亡」 (山梨; 93. 8. 1. 読売)

山梨県の富士山7合目付近で、登山客2名が相次いで死亡した。広島県の男性と福島県の男性いずれも急性心不全であった。

⑬「富士山で男性急死」 (山梨; 93. 8. 14. 新潟日報)

富士吉田市の富士山六合目付近で東京の男性が倒れ、急性心不全で間もなく死亡した。男性は仲間3人と登山をしていたが、20分ほど登ったところで急に意識を失った。

⑭「軽装の31才男性凍死」 (北海道; 93. 8. 17. 北海道)

北海道大雪山の旭岳で男性の死体が発見された。男性は外傷がなく死因は凍死とみられる。半袖のシャツにズボンの軽装で食料は携帯していなかった。

⑮「転落男性遺体で発見」 (長野; 93. 8. 19. 信濃毎日)

南アルプス登山口の塩川の木橋から流されてた男性登山者は遺体で収容された。原因は、木橋を渡り切ったところでバランスを崩し、流されたらしい。

⑯「東京の看護婦北ア槍沢の遺体」 (長野; 93. 9. 17. 信濃毎日)

北アルプス槍沢で見付かった遺体は、東京の看護婦を分かった。調べによると1人で入山し、過度の疲労で凍死したらしい。

⑰「登山中に心不全73才男性が急死」 (北海道; 93. 9. 24. 北海道)

十勝岳連峰三段山で登山中の男性が「胸が痛い」としゃがみ込みそのまま意識がなくなった。現場に救助隊が到着したとき、男性は既に死亡していた。この日の十勝岳一帯の気温は5度。立っているのがやっとの強風が吹いており、体感気温はさらに低く、高齢者には厳しい気象条件だった。

⑱「宮城の男性か、遺体見付かる」 (長野; 93. 10. 4. 河北新報)

長野県中央アルプスの梯子ダル沢を登っていた登山者が尾根から 300 m下の沢で白骨化した遺体を発見した。所持品などから今年5月に行方不明になっていた宮城県の男性と見られている。

⑱「北アの不明ライター1人救助、1人死亡」 (富山; 93. 10. 9. 日本経済)

北アルプス湯川谷付近で行方不明になっていたフリーライターの男性など2名を救助した。またもう一人も発見したが、既に死亡していた。

⑳「登山道男性倒れ死亡」 (長野; 93. 10. 11. 信濃毎日)

北アルプス前常念岳から常念岳に向かう登山道で、静岡県が倒れ、死亡した。調べによると男性は単独行で、通りがかりの登山者の話だと病死らしい。

4) 山岳事故 (総括)

①「北ア中心発生 104 件、過去 10 年で最悪」 (長野; 93. 1. 27. 信濃毎日)

長野県警では昨年一年間の県下での山岳遭難状況をまとめた。北アルプスを中心に前年より 12 件多い 104 件発生し、過去 10 年間で最悪の結果となった。原因としては、不注意による転・滑落や気象判断の甘さ、入山前の準備不足が多いと分析している。

②「山岳救助スピードアップ、ヘリ要員初めて配置」 (静岡; 93. 2. 13. 静岡)

富士山や南アルプスでの遭難事故発生時に活躍する県警山岳救助隊のメンバーが現行の 15 名から新年度 20 人に増員・強化される。単に人数を増やすだけでなく、初めて航空隊 (ヘリコプター) に専属の救助隊員を配置し、遭難現場周辺の情報収集、空からの救助活動などのスピードアップを図る。

③「天候急変、こわい春山、連休の山死者 8・不明 6 人」 (93. 5. 4. 読売)

2日から3日にかけて日本列島を北上した低気圧により大陸の寒波が引き込まれ、関東から東北にかけて3月初旬から4月並みの気候になり、各地で遭難が相次いだ。最近では登山装備も進歩し、手軽に入手できるようになった。しかし気象条件の分析能力、登山技術が追い付かず、装備を使いこなせない登山者も少なくない。また交通手段の発達により、素人登山者が増え、遭難の発生に拍車をかけている。

④「富士登山も大幅減、死者は3人」 (静岡; 93. 9. 1. 静岡)

富士山5合目に開設された富士宮署の警備派出所によると、開設期間中の死者は3名だった。また負傷者の救護は2件2人で前年より4人減った。

⑤「夏山の遭難多発、死者・不明 45 人に」 (93. 9. 4. 朝日)

今年の夏の山の遭難による死者・行方不明者が過去 14 年で最高になり、逆に水の事故は過去 10 年間で2番目に少なかったことが警視庁のまとめで分かった。

5) スキー事故

①「スキーヤー立ち木に衝突激突死」 (長野; 92. 12. 30. 信濃毎日)

志賀高原のスキー場で愛知県の男性が倒れているのをスキーヤーが見付けたが、頭蓋骨骨折のため間もなく死亡した。中野署の調べによると現場はなだらかなコースで、男性は頭の他肋骨5、6本も折っていた。高さ10m太さ18cmのモミの木に激突したとみられる。

②「ナイタースキー立ち木に激突、死亡」 (北海道; 93. 1. 24. 毎日)

北海道富良野スキー場で会社役員の男性が、ナイターコースから約10m離れた林の中で倒れているのをスキー客が見付けた。男性は頭の骨を折っており、間もなく死亡した。スピードを出しすぎてコースから外に飛び出し、立ち木に衝突したらしい。

③「スキーのエッジで頸動脈を切り死亡、高2滑走中に激突」

(福島; 93. 2. 1. 産経)

福島県の村営雷神山スキー場で県立高校2年生が滑走中に転倒し、後ろから滑ってきたスキーヤーとぶつかった。衝突の際スキーのエッジで頸動脈を切り、間もなく死亡した。

④「スキー事故死今冬もう9人」 (総括; 93. 2. 14. 朝日)

今冬スキーヤー9人が死亡している。過密ゲレンデの交通事故といえる。「自損事故」が目立っている。

⑤「神戸のスキー客建物柱に激突死」 (長野; 93. 2. 21. 信濃毎日)

御岳スキー場で神戸市の会社員がリフトの運転室建物の柱に激突、頭蓋骨骨折で死亡した。木曾署の調べだとスピードが出過ぎてバランスを崩し、倒れながら建物に突っ込んだらしい。

⑥「スキーの小4立ち木に激突死」 (長野; 93. 3. 14. 信濃毎日)

北志賀よませスキー場で、近くに住む小学4年生がゲレンデ脇の立ち木に衝突、病院に運ばれたが、頸椎損傷で死亡した。中野署の調べによるとボールの練習中曲がりきれずにコースから飛び出したらしい。

⑦「意識不明の小学生死亡・スキー中に衝突」 (北海道; 93. 3. 15. 北海道)

札幌市の真駒内スキー場でゲレンデを滑っていて同級生と衝突、顔を強く打って意識不明の重体だった小学5年生が、同市内の病院で死亡した。

⑧「主婦が滑落死・羅臼で歩くスキー中」 (北海道; 93. 3. 29. 北海道)

根室管内羅臼町の熊ノ湯の国有林で、歩くスキーに参加中の女性が約10m下の沢に転落して死んでいるのを仲間が発見した。

⑨「スキーで滑落男性が死亡」 (青森; 93. 4. 30. 朝日)

青森県の岩木山系に春スキーに来ていた東京の男性が滑落した。捜査したと

ころ男性を発見したが、既に死亡していた。

⑩「軽装春スキーの悲劇」 (山形; 93. 5. 4. 読売)

山形・月山で新潟大生4人が遭難した。新潟大生は、全員が初心者で緊急時の備えもなかった。

⑪「立ち木に衝突スキーヤー死亡」 (長野; 93. 5. 5. 信濃毎日)

北アルプス常念岳にある常念小屋の雪渓で山スキーをしていた同小屋の従業員が転倒して立ち木に衝突、頭を強く打ち、脳挫傷のため死亡した。

⑫「リフト座席“ボキッ”」 (新潟; 93. 5. 10. 新潟日報)

奥只見丸山スキー場で新潟の会社員が乗っていた1人用のリフトを吊り下げる座席支柱が切れ、約5m下の雪の上に落ち、腰の骨を折る重傷を負った。同リフトのパイプの内部はかなりすり減っていた。

6) スキューバダイビング事故

①「ダイビング中はねられ死亡」 (北九州; 92. 12. 27. 熊本日日)

遊漁船が場所を移動しようとした際、潜っていた人に気付かず、プロペラがダイバーの頭をはね、ダイバーは死亡した。

②「安全面の配慮欠く、ダイビングインストラクター指導歴なし」

(千葉; 93. 1. 5. 産経)

スキューバダイビングツアーに参加したダイバー13人が高波のため、漂流して1人が死亡した事故で、ダイバーに付き添ったインストラクターには、全く指導経験がなく、チャーター船には救命ボートが一隻も装備されてなかった。

③「ダイビングの男性水死、水深30mで息苦しさ訴える」

(沖縄; 93. 3. 22. 沖縄タイムス)

沖縄県渡嘉敷ビーチでダイビング中の男性が溺れ、死亡した。那覇署の調べによるとインストラクターを含む8人で、水深30m地点でダイビング中、息苦しさを訴えてインストラクターと共に浮上した。病院に運ばれたが既に呼吸が停止しており、1時間後に死亡した。事故原因を那覇市が調べている。

④「東京のダイバー水死」 (静岡; 93. 4. 19. 静岡)

沼津市で東京からダイビングに来ていた男性が行方不明になった。捜索したところ海底に沈んでいるのを発見し、引き上げたが既に死亡していた。

⑤「ダイビングの会社員が水死」 (和歌山; 93. 5. 17. 京都)

和歌山県白浜の紀伊水道でスキューバダイビングをしようとしていた会社員が高波に流され意識を失った。男性は仲間に助けられ、病院に運ばれたが水死した。調べによると自分の酸素ボンベが故障したため、仲間の酸素吸引器を使っていたが、高さ1.5mの高波に揉まれて吸引器を流されたらしい。

⑥「潜水中の会社員不明・捜索の巡視艇乗組員水死」

(北海道 ; 93. 7. 19. 北海道)

小樽の海水浴場で男性がスキューバダイビングに出たまま帰らないと友人が届け出た。このため巡視艇が捜査を始めたが、巡視艇乗組員の男性が波にのまれて死亡した。

⑦「スキューバダイビングの女性死亡」 (和歌山 ; 93. 8. 15. 京都)

和歌山県白崎海岸の沖でスキューバダイビングをしていた大阪の女性が水のみ溺れた。仲間が海底から引き上げ、病院に収容したが既に死亡していた。

⑧「潜水講習中溺れ死亡」 (沖縄 ; 93. 8. 17. 熊本日日)

沖縄宮城海岸でスキューバダイビングの講習を受けていた京都の学生が溺れ、病院へ運ばれたが死亡した。死亡した女性はインストラクターについて指導を受けていたが、空気ポンベの空気が残り少なくなったため、ブイにつかまっているように指示を受けていた。

⑨「ダイビング講習中の事故、指導者の責任が問われる場合も」

(総括 ; 93. 8. 23. 日本経済)

スキューバダイビングの人気の急上昇している。国内の愛好者の数はここ5・6年で4倍近くまで膨らんだが、水中でのスポーツは常に死の危険と隣り合わせ。事故が起きた場合の責任についても基本的には「事故から身を守るのは自分」という自己責任の原則で臨むスポーツといえる。

⑩「女性ダイバー水死」 (静岡 ; 93. 8. 30. 読売)

静岡県の沼津でスキューバダイビング中の女性が行方不明になり間もなく発見させたが、大量に水を飲んでおり、病院で死亡した。尚、その女性はダイビング歴4、5年であった。

7) カヌー事故

①「カヌーが転覆会社員死亡」 (京都 ; 93. 7. 7. 京都)

京都府の由良川でカヌーの練習をしていた会社員が、高さ約2mの小屋堰から転覆、いったん同僚に助けられたが、再びカヌーを取りに行こうとして下流に流された。男性は4km下流で発見され、病院に運ばれたが、死亡した。

②「人気のカヌー、事故も増加、各地で安全対策講習会」

(総括 ; 93. 8. 17. 日本経済)

アウトドアブームを背景にカヌー人気が高まっているが、事故も増加している。事故のほとんどは経験不足や、未熟な技術が原因。安全教育の徹底には、まず指導者の養成が必要と指導者検定コースを設けているところもある。

③「カヌーが転覆、父水死」 (兵庫 ; 92. 8. 23. 読売)

兵庫県の千種川で父と子供の乗ったカヌーが転覆し、2人は急流にのまれた。父親は40分後に約20mまで流されているのを発見され、病院に運ばれたが、

既に死亡していた。尚、子供は下流の中州に打ち上げられ無事だった。

④「カヌー転覆、二人死に、1人不明」 (三重；93. 10. 3. 読売)

三重県多木町の五桂池で4人乗りのカヌーが転覆し、1人は岸に泳ぎ着いたが、他の3人は行方不明になり、内2人が遺体で見つかった。尚、池には「カヌー禁止」の看板を立てて警告をしていた。

8) その他のマリン・スポーツ

①「水上バイク同士衝突、同乗の男性が腹部打ち、死ぬ」

(長崎；93. 6. 28. 西日本)

長崎県の大村湾で近くに住む男性2名が運転する水上バイクが衝突し、衝突の際腹部を強く打ち、内臓破裂でまもなく死亡した。もう1人の男性には怪我はなかった。

②「水上バイク衝突、相次ぎ二人死ぬ」 (愛知・福井；93. 8. 2. 読売)

愛知県蒲浦市の西海岸で、同県岡崎市の塗装業の男性が水上バイクで衝突、胸の骨を折るなどして死亡した。後ろに同乗した友人も右足に軽い怪我をした。

また福井県でも滋賀県の会社員男性と、京都市の男性が水上バイクで衝突、滋賀県の男性は海に投げ出され胸の骨を折るなどして死亡した。

③「ボードセイリング同士衝突、ひき逃げ会社員逮捕」 (滋賀；93. 6. 7. 毎日)

滋賀県琵琶湖でボードセイリング中の大学生が、腹を切る怪我をし、出血多量で死亡した。調べによると被害者のボードが京都の会社員のボードと正面衝突し、ボードの先端が被害者に直撃したか転倒時にボードの突起物に突き刺さったものとみて、調査を続けている。

④「サーフィンの女性2人不明」 (宮城；93. 5. 10. 読売)

仙台市の荒浜海岸にサーフィンに出掛けた女性2人が戻らないと家族から届け出があった。仙台南署では、サーフィン中に遭難した可能性があると見て捜索を続けている。現場は地元のサーファーが集まる場所だが、当日は風も強くなく波も穏やかだった。

⑤「水難の救助率アップ」 (沖縄；93. 3. 11. 沖縄タイムス)

県警防犯部では、このほど平成4年の水難事故概況をまとめた。全水難者99人中53人が救助されており、警察では「事故の発生が多かった割には水死者が少なく、救助率の高い年だった」と分析している。

⑥「ビニールボート空気抜け、湖横断中に不明」 (滋賀；93. 8. 29. 京都)

滋賀県の琵琶湖で湖を横断しようとしていた、県内の中学生3名が乗ったビニールボートの空気が抜け始めた。2人は岸へ泳ぎ着いたが、1人が行方不明になった。

⑦「死者、不明者昨年比19人減」 (総括；93. 8. 30. 産経)

警視庁の調べによると、7月からの水の事故犠牲者は、死者402人、行方不明者40人で昨年同時期に比べ死者、行方不明者を合わせると19人減少した。

9) スカイ・スポーツ

- ①「ハンググライダー墜落し2人重軽傷」 (佐賀; 93. 9. 27. 西日本)
佐賀県唐津市上空約20mを飛行していた動力機つきハンググライダーが風にあおられ墜落した。運転していた男性は唇に軽傷を負い、助手席の男性は肋骨骨折など重傷を負った。
- ②「ハンググライダー電柱に激突し重体」 (広島; 93. 10. 25. 中国)
広島県安佐北区の神ノ倉山で開催された大会に参加していた福岡県の男性が操縦するハンググライダーが電柱に衝突し、電線に宙吊りになった。男性は病院に運ばれたが頭部を強打して意識不明の重傷を負った。調べによると山頂から飛び立って滑空中に強風にあおられたらしい。
- ③「パラグライダーW杯また事故2選手墜落、重体」 (福岡; 93. 3. 4. 西日本)
「93パラグライダーワールドカップIN九州」に出場中のドイツの選手が、電線を避けようとしてバランスを崩し約10m下の田んぼに落下、足などを骨折し重体を負った。同じ頃英国の選手も機体の羽が強風でつぶされ高さ約10mから近くの草地に墜落し、腰や背骨を骨折した。2人ともパイロット歴5年で、強風にあおられたらしい。
- ④「パラグライダーとハンググライダー衝突落ちる」 (和歌山; 93. 3. 21. 朝日)
和歌山県で高さ50mの空中でハンググライダーとパラグライダーが衝突し、それぞれ着陸するように落ちた。パラグライダーは農作業中の男性に当たり、それぞれ怪我をした。
- ⑤「パラグライダー中会社員墜落し死亡」 (神奈川; 93. 4. 4. 朝日)
秦野市丹沢山中で県内の会社員がパラグライダーを装着した状態で倒れているのをハイカーが見付けた。救助に駆け付けた仲間が麓まで運んだが、頭などを強く打ち病院で死亡が確認された。
- ⑥「パラグライダー斜面に激突、男性重体」 (熊本; 93. 5. 5. 熊本日日)
阿蘇郡の俵山展望台付近でパラグライダーをしていた会社員の男性が操作を誤り斜面に激突した。男性は全身を強く打ち、意識不明の重体。高森署の調べによると座席を吊す紐が絡まった上、強い横風に流されたらしい。
- ⑦「パラグライダー操作ミスで重傷」 (沖縄; 93. 7. 5. 沖縄タイムス)
石垣島でパラグライダーをしていた千葉県の男性が、操作ミスで15mの高さから落下し、足の骨などを折って全治1カ月の重傷を負った。調べによると風が強かったため、翼端を畳むように指示したところ誤って全翼を畳んだためとみられている。

- ⑧「パラグライダー安曇村で墜落死」 (長野; 93. 7. 25. 信濃毎日)
長野県安曇村の富士見山でパラグライダー飛行中の男性が地上に墜落、全身打撲で間もなく死亡した。
- ⑨「パラグライダー墜落し女性死亡」 (兵庫; 93. 9. 20. 神戸)
兵庫県ハチ北スキー場で大阪の女性が操縦していたパラグライダーがリフトのワイヤーに衝突し、そのまま道路に落下した。女性は頭などを強く打ち、約1時間後に死亡した。
- ⑩「パラグライダー墜落、神戸の男性骨を折る」 (兵庫; 93. 10. 4. 神戸)
兵庫県氷上郡で神戸の男性が操縦するパラグライダーが10 m下の河川敷に墜落した。男性は腰の骨を折り3カ月の重傷を負った。調べによると岩屋山から飛び立ったが、予定地を通過しそうになったため、急ブレーキを掛けたところ失速、墜落したらしい。
- ⑪「パラグライダー墜落男性が死亡」 (長野; 93. 10. 13. 信濃毎日)
白馬村の白馬47スキー場で、愛知県の会社員のパラグライダーが墜落した。男性は病院に収容されたが、胸の強打に伴う肺挫傷などで死亡した。

2. 野外活動中の事故の傾向と特性

ここでは平成5年(1993)の1年間に、国内における新聞各紙において記事として報道された野外活動関連の事故を整理し、その実態を把握した。その結果を、次のような傾向としてまとめることができる。

1) キャンプ中の事故(5件、死者6名)

行動形態としては、個人または小グループでの活動であり、用具・道具の使用不適切によるもの3件、行動上の不適切による溺水2件であった。

2) 山岳事故(41件、死者42名)

報道件数としては、山岳事故が最も多かった。事故の形態としては、この内21件が滑落もしくは転落によるものであり、登山行動の不適切または技術不足をあげることができる。またこれら事故の救出活動中の事故として、2名の死亡ならびに1名の重体が報告されており、水難事故と同様に救出活動中の二次災害についても見落とすことができない。一方、体調不良および健康状態が直接的な原因となっているケースが9件あり、経験未熟な段階での安易な登山が問題視される。

3) スキー事故(11件、死者9名)

スキーにおいて死亡事故につながる多くの原因は衝突によるものであり、ここでも立ち木または構造物への衝突が5件、人との衝突によるものが2件であった。

4) スキューバダイビング事故 (9件、死者9名)

スキューバダイビングでは、その事故のほとんどが死亡につながるケースが多く、ここでも報道された全てのケースに死者が発生していた。また活動環境の特殊性により、その事故原因についても特定することが難しく、結果的には溺水の形になっていることが多い。活動形態の上では、他の一般的な野外活動とは異なって初心者が個人で行動することはなく、必ず有資格者としてのインストラクターもしくはガイドと呼ばれる指導者と共に複数で行動することとなっており、指導者としての安全管理能力の向上が望まれる。

5) カヌー事故 (3件、死者4名)

アウトドア・スポーツの多様な発展と普及にともない、事故の種類も多様化してきている。以前は一部の専門家や特定の愛好者によって活動が展開されていたカヌーも、その用具が身近に安価で手にはいるようになったことから急速に愛好者も増加し、広く親しまれるようになった。しかし、その取扱や技術に関して指導を受ける体制が整備されていないため、技術も経験も未熟な段階で活動を展開するケースが増加しており、事故に結び付いていると言える。

6) その他のマリン・スポーツ (5件、死者・不明者7名)

昭和63年を“マリン元年”(財・日本海事広報協会)ととらえているように、近年の我が国においては海を積極的にスポーツやレジャーのフィールドとして活用する傾向になった。そこでは泳ぐこと以外に、様々な乗り物が用具として使用されるようになっており、水上バイクと呼ばれる“パーソナル・ウォーター・クラフト”もその一つとして急速に普及した。これらの乗り物は、かなりの高速で動き回ることから、同種・異種間の対物および対人の衝突事故が発生している。

9) スカイ・スポーツ (11件、死者4名)

最近ではスカイ・スポーツという範疇のもとに、パラグライダーやハンググライダーと呼ばれる簡易飛行装置を使用しての活動が愛好者によって行われるようになった。この活動での事故は、多くの場合操縦ミスによって墜落し、重体という結果を生じている。

自然環境を積極的に利用して展開される各種の野外活動は、最近の自然志向や健康志向の盛り上がり、また余暇時代や生涯学習時代といった時代背景の影響を受けて急速に普及し、親しまれるようになった。さらに関連用具・用品の製造・流通部門の成長と活性化、ならびに各種メディアの発達による多量な情報といった周辺状況の充足により、誰もが手軽に取り組み、また楽しめるようになった。しかし、このことが安易な参入を許し、未熟な段階での活動を容認することとなり、事故の増加を促す結果に繋がっているととらえられる。

今回整理した資料は、1年間の新聞紙上において報道されたものに限っており、その方法論的性格から決してこれらが発生した事故の全てではない。しかし、その傾向と特性を把握する上においては、十分に有効な方法であると言える。

以上による資料整理と検討の結果から、近年の野外活動における事故の傾向と特性については、次のようにまとめることができる。

1) 事故の種類が多様化している。

技術の発達と自由な発想により、海・山・空にまたがる多様な自然環境を背景とし、フィールドとして利用しながら展開される野外活動は、近年その活動の種類が急速に多様化し、それぞれに活動人口も増加している。それに伴い、事故の種類も多様化してきている。

2) 環境特性についての把握が未熟である。

野外活動においては、そのフィールドは様々であっても、常に変化する自然条件に対応しかつ利用しながら実践されるものである。特に気象・天候条件からは直接的な影響を受けることから、それらの変化の様子を十分に把握すると共に適確な対応行動が求められる。

3) 用具・器具取扱上の不備・不適切が目立つ。

野外活動は、それぞれの活動において専門的な用具・器具を使用して行われることが多い。そしてそれらの専門的な用具・器具は、概して“Simple is the Best”の思想ならびに軽量化およびコンパクト性を求めることから、簡素化された構造を示すことが多く、使用にあたっては知識と経験に裏付けられた技術を用いて使いこなすことが求められる。

4) 個人レベルでの活動が主体となっている。

事事故例の中では、組織立った活動での事故報告は少なく、ほとんどが個人または小グループでの自主的・主体的な未組織活動としての事例が多い。このことが活動に対する判断を甘くし、知識や技術が未熟な段階での活動を容認していると共に、緊急事態での対応においても遅れを生じる原因となっている。またこれらの傾向は、多面的な社会情勢の変化から近年富に進んでいる傾向であり、今後も生涯スポーツとしての社会的定着に伴って促進される傾向であろう。

3. 野外活動における今後の対応

我が国における余暇活動およびスポーツとしての野外活動は、近年になって急速に普及し、広く親しまれるようになった。しかしその歴史は浅く、組織立った指導や育成が図られる間もなく一般に普及し、積極的に活動が展開されるようになったと言える。

折しも昭和40年代後半より、元来学校教育において伝統的に実施されていた「臨海学校」や「林間学校」が相次いで実施されなくなり、実際に海や山などに出かけた場合の基本的な注意事項について指導を受ける機会がなくなったことも遠からず影響していると言えよう。

改めてここまで普及・興隆した野外活動について、その活動内容を整理し、公的な裏付けを有した指導体制の整備と、具体的な安全管理方法の確立を急がねばならない。

また今回整理したような新聞報道による事故事例は、関心を抱く多くの人々が貴重な学習材料として役立て、今後の安全な活動の展開に役立てる上での価値は高い。しかしながら新聞紙上に掲載された事例が決して事故の全てではなく、新聞としてのメディアの特性から記事としての掲載にはニュース・パリュウーとしての観点からの判断が働き、事故の全体像を正確に伝えているものとは言えない。この点においても、公的な機関による活動状況や事故の実態についての信頼度の高い資料の整備や積極的な広報活動が望まれる。

< 参 考 文 献 >

- 1) 月刊切り抜き体育・スポーツ「スポーツ事故・事件」, No.226~237 ;I.O.M., 1993~1994.